青森県立郷土館研究紀要　第49号,151－170, 2025. 3

イザベラ・バードが見た「ヤグラ」
－青森県津軽地方の寝宿の習俗－

増田公寧[1)]

Raised Structures Isabella L. Bird Encountered: A Critical Analysis of “Platforms on Scaffold Poles” in 1878 Aomori Prefecture, Northern Japan

MASUTA Kimiyasu

Key Words：年齢集団,年齢階梯制,若者組,寝宿慣行,高床建物,イザベラ・バード

はじめに

イギリスの探検家・旅行作家として知られるイザベラ・ルーシー・バード(Isabella Lucy Bird,1831-1904)は、1878(明治11)年の夏に黒石(青森県黒石市)を訪れ、高さ6～7.5メートルほどの四本柱の構造物(以下「構造物」)を目撃した。この「構造物」については、バード研究者らにより、「こみせである」「火の見櫓である」などの諸説が提示されている。これら従来の研究成果に対し、筆者は新しい説を示す。「ヤグラ式寝宿」説である。本県では主に津軽地方の農村において、若者集団がヤグラ(仮設の高床建物)を組んで小屋がけし、寝泊まりする習俗があった。このヤグラは、いわゆる寝宿の一様式であり、昭和30年代ころまでは東北地方北部にみられ、類似の様式が四国地方西南部、九州南部に分布した。この「構造物」や習俗の特徴が、バードの記録と一致する。

本稿では、**1.**バードが目撃した「構造物」についての従来の説を確認し、**2.**津軽地方においては若者集団の寝宿にヤグラ(高床建物)が用いられたことを明らかにしたうえで、**3.**バードが見た「構造物」が寝宿としてのヤグラであった可能性を示す(新説)。本稿の最終的な目的は**3.**だが、**2.**を明らかにすることも目的の一つである。なお、従来の研究については各章のなかで確認する。

1. バードが見た「構造物」

1.1. 失われた「構造物」に関する描写

バードが見た「構造物」について論じるためには、その描写を確認する必要がある。しかし訳者による解釈の相違や、邦訳によっては「構造物」の描写を欠くものが存在するなどの問題がある。この問題は、バードの著作 *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé*（原著)が辿った経緯(**1.2.**)と、その邦訳に伴う経緯(**1.3.**)が関係している。本題に入る前にこの点を確認する。

1.2. 原著の改訂の経緯　(文中の丸数字は**資料1**のデータを参照)

英国で①John Murray社初版(1880)が出版されたのちに出た②Putnam’s Sons社版(1880)は、①の各報に付与された連番のかわりに小見出しが付けられたもので、内容自体には大きな変更はなかった。しかしその後、よりポピュラーな書物として販売するために、①の内容を大幅に削除する操作が施された。それが③John Murray社省略版(New Edition, Abridged,1885)である(以上の詳細は高畑2010を参照)。③で削除された部分には、「構造物」の描写も含まれていた。

資料1) 改訂の履歴　(引用文献中の傍線はすべて筆者加筆)

①John Murray社初版(1880)

タイトル：*Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé*

『日本の未踏の地－蝦夷の先住民と日光東照宮および伊勢訪問を含む内地旅行の報告』

発行年・出版社：明治13(1880)年　2巻本　ロンドン John Murray社

内容：第一巻　横浜到着、東京公使館滞在、日光経由、福島、新潟、山形、秋田、青森、函館上陸

第二巻　「蝦夷に関する覚書」(北海道での見聞と体験、「東京に関する覚書」(東京の紹介)、神戸、大阪、京都、伊勢神宮、津、Japanese Public Affairs

②Putnam’s Sons社版(1880)

タイトル：*Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels on Horseback in the Interior, Including Visits to the*

1)青森県立郷土館主任学芸主査　〒030-0802 青森市本町二丁目8-14

Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé

発行年・出版社：明治13（1880）年　ニューヨーク Putnam's Sons社

内容：John Murray社初版と変わらないが、各報の連番のかわりに「小見出し」が付けられている。この小見出しは、各報のテーマを簡潔に示すものであり、読解の参考になる2)。

③John Murray社省略版（New Edition, Abridged,1885）

タイトル：*Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrine of Nikkô*

『日本の未踏の地－蝦夷の先住民と日光東照宮訪問を含む内地旅行の報告』

発行年・出版社：明治18（1885）年　ロンドン John Murray社

内容：初版本の随所に削除が行われ、第二巻の後半（伊勢・関西方面、覚書など）は大規模に削除され、分量が約半分に減らされた「省略」版（操作としては「縮約」というよりも、「省略」）である。

④George Newnes社新版

タイトル：*Unbeaten Tracks in Japan: A Record of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé,* New Edition, London, George NewnesLimited

『日本の未踏の地－蝦夷の先住民と日光東照宮・伊勢神宮訪問を含む内地旅行の記録』

発行年・出版社：明治33（1900）年　ロンドン、George Newnes社

内容：新版への序と写真14点を加え、Japanese Public Affairs（最終章）を大幅に削除したもの。

1.3. 邦訳の経緯　（文中の丸数字は**資料1・資料2**のデータを参照）

日本では、⑤高梨健吉訳『日本奥地紀行』（1973）によってバードの著作が広く世に知られるようになった。ところがこの邦訳は、本来底本とすべき原著である①②ではなく、省略改訂版の③を底本とした。そのため、①②で描かれていたバードの旅の多くの叙述が失われた不完全な状態で、日本の読者に紹介された。このことにより、バードの旅が東日本～北海道を巡る旅であったという誤ったイメージが一般化した。しかし実際には、西日本の伊勢を含む関西方面をも旅している（第2巻後半部）。

削除された第2巻後半部を中心に訳出したのが、⑥楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳『バード日本紀行』（2002）であった。しかし、③において削除されていたのは第2巻後半部だけではなかった。実は原著の全体を通して、随所に削除された部分があった。その削除部分のみを抽出して訳出したのが、⑦高畑美代子訳『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』（2008）である。すなわち、⑤⑥⑦の3冊を以て、はじめて①の原著全体の邦訳が揃ったのである。

同年、①の原著のすべてを邦訳した単著⑧時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行』（2008）が出版され、その後⑨金坂清則訳『完訳日本奥地紀行』1-4（2012-2013）が出版された。⑨の訳者によって、省略版である③もあらためて訳出され、⑩金坂清則訳『新訳日本奥地紀行』（2013）として刊行された。

以上の経緯から、原著①におけるバードが黒石で目にした「構造物」に関する叙述は、邦訳⑦⑧が2008年に出版されるまで、日本の一般の読者には殆ど知られていなかったのである。

資料2）　邦訳の履歴　（引用文献中の傍線はすべて筆者加筆）

⑤昭和48（1973）年　高梨健吉訳『日本奥地紀行』（平凡社）

John Murray社省略版を底本とした日本語訳書。後半の関西旅行が大幅に削除されたため、北関東から東北、北海道の旅行記であるという誤解が生じた3)。

⑥平成14(2002)年　楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳『バード日本紀行』雄松堂出版

第二巻後半削除部分（関西方面）の日本語訳

⑦平成20(2008)年　高畑美代子訳『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』

②の楠家ほか訳で補完された部分以外に、未だ翻訳されていなかった各報の削除部分を訳した補遺。「この削除部分には多くの民俗学的記述が含まれており、彼女が日本の何に関心を持ち何が彼女の旅の活力となったのか考える材料として資するものであると考える」（同書p.3）

⑧平成20(2008)年　時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行』(上)(下)講談社学術文庫

平成20（2008）年　初版の2巻本を完訳したもの（完全本原著を底本にした初の邦訳）。

⑨平成24-25(2012-13)年　金坂清則訳『完訳日本奥地紀行』1-4（東洋文庫819・823・828・833）

初版の完訳。詳細な注釈により、バードの旅を立体的に把握することが可能な、邦訳の決定版。

⑩平成25(2013)年　金坂清則訳『新訳日本奥地紀行』（東洋文庫840）

省略版の邦訳。

1.4.「構造物」の描写

前項で、原著の改訂に係る経緯によって邦訳にもバリエーションが生まれ、最もポピュラーな邦訳に当該部分の描写が欠如していたこと、ゆえに長らく日本の一般の読者にはその存在自体が知られなかったことを確認した。

次に、省略された当該部分の記述の内容を確認する。バードが黒石に逗留したのは、1878年8月3日、4日、5日であると考えられ、5日付（黒石滞在3日目）で見聞を報告している。この報告は手紙の形式をとっているものの、現地から実際に手紙を送ったわけではない4)。

当該部分は、XXXV(第35報)、Putnam's Sons社版ではPopular Superstitionsの小見出しが付与されている一節で、John Murray社省略版では、章がまるごと削除されている。

高畑美代子によると、John Murray社省略版において削除されたのは、概して①キリスト教や伝道に関すること、②日本の信仰や迷信、葬式に関すること、③医療に関すること、④日本人観や女性観、であった。近代化の途上にある日本の教育や医療の現状や、迷信や女性蔑視などに対する、彼女の西洋的批判的精神にもとづく叙述が削除されることで、日本についての研究という初版の特徴が後退し、東北という「未開の奥地」への「旅と冒険の物語」という色彩が強められた。これは省略版を出すにあたって、よりポピュラーな書物として再構成したいという出版社の意向にもとづくものであったようだ。しかし彼女の本意でなかったことは、のちに削除された部分を復活させたGeorge Newnes版（1900）が出版されたこと、そしてサブタイトルの冒頭がAn AcconutからA Recordへと変更されたことから推察される。George Newnes版の出版は、同書が単なる「冒険ものがたり」ではなく、学術的価値のある「記録」であり、日本研究の旅なのだという彼女の自負が表明されたものであると捉えられる5)。Putnam's Sons社版におけるPopular Superstitionsの小見出しから推察されるように、「構造物」に関する習俗も地方の日本人の迷信・奇習の一例として初版に記述されていたが、上述のような経緯によって「省略版」では削除されてしまった。そして日本における「定本」である高梨健吉訳が「省略版」を訳出したものであったことにより、当該部分の記述の存在自体が、長らく知られなかったのである。

資料3）各版・各邦訳における「構造物」の描写　（引用文献中の傍線はすべて筆者加筆）

①John Murray版（1880）

L etter XXX V

. . . Kuroishi differs from most of the small towns in being on rather an elevated plateau overlooking the great plain of Iwakisan, a sea of rice, with islands of wooded villages, Nidi, Owani, Yakushida, Onoyé, Nakanowa, Kashiwagimachi, and many others. There was a small castle, but it is destroyed, and the rampart, now a pleasant walk for the townspeople, has a magnificent view of the mountains and the rich plain, over which great cloud-shadows were passing in deep indigo colouring. Another unusual feature is a number of square covered platforms on scaffold poles twenty and twenty five feet high, to which people carry their bedding on very hot nights, to be out of the way of mosquitoes.

-- Isabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé* p.378

②Putnam's Sons版（1900）

Popular Superstitions

. . . Kuroishi［以下本文はJohn Murray版と同じ］

-- Isabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé*

G.P.PUTNAM'S SONS p.387

③～⑥は既述のとおり「構造物」の描写を欠く

⑦高畑美代子訳(2008)

「黒石は、ほとんどの小さな町と違っていて、ニヂ[虹貝または二双子]、大鰐、薬師田、尾上、中野和、柏木町や他の多くの森に囲まれた村の島々のある広大な岩木山の平原である米の海を見渡すことのできる高くなった台地に位置しています。かつては小さな城があったのですが、破壊されてしまいました。今では、町に住む人々の楽しい散歩道になっている城塁からは、山々と豊かな平野の壮大な景色が見られます。その上を深い藍色をした大きな雲の陰が通りすぎていました。他の普通と異なった特徴は20から25フィートの高さの骨組みの柱に乗った沢山の屋根のついた四角いプラットホームがあることです。とても暑い夏の夜は、そこへ蚊から逃げ出すために、彼らの寝具を持ち込むのです」。

高畑美代子2008『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』pp.121-122

⑧時岡敬子訳(2008)

「黒石は小高い台地にあって岩木山の広大な平野が見渡せるところがほかの多くの小さな町とはちがいます。平野の水田の海原にはニヂ[虹？]、大鰐、薬師堂、尾上、ナカノワ、柏木町などなど、森のある村が島状にあります。昔は小さな城がありましたが、いまは崩れており、城壁は町の人々の楽しい散歩場所で、山々と豊かな平野を藍色の雲の影が通っていくすばらしい眺めが得られます。もうひとつの変わった特徴は、高さ二〇フィート[約六メートル]と二五フィートのやぐらに屋根つきの四角い台が載っているものが多くあることで、とても暑い夜は蚊に食われないようここに寝床を持ち出します」。

時岡敬子2008『イザベラ・バードの日本紀行(上)』pp.457-458

⑨金坂清則訳(2012)

「黒石はたいていの小さな町とは違って小高い台地[扇状地]の上に立地しており、岩木山(イワキサン)のある大きな平野[弘前平野]を見下ろすことができる。この平野には水田が海のように広がり、そこに乳井(ニジ)、大鰐(オワニ)、薬師堂(ヤクシダ)、尾上(オノエ)、浪岡(ナカノワ)、柏木町(カシワギマチ)そのほか多くの木立に包まれた村落が島のように点在している。黒石にあった小さな城は壊され、今や町の人々にとっての楽しい散歩道をなしている土塁跡からは、山々と豊かな平野がつくるすばらしい眺めを見ることができる。私が見た時にはちょうどそのかなたを大きな雲が深い藍(あい)色の影をなして流れていった。他にはない[黒石の]もう一つの特徴は、高さ二〇～二五フィート[六～七・五メートル]の数本の柱で支えられた屋根のある四角い台[櫓]がいくつもあることである。住民は非常に暑い夜には蚊を避けるために夜具を持って上がる[とのことである]」

金坂清則2012『完訳　日本奥地紀行』pp.226-227

邦訳⑦⑧⑨を比較すると、a number of の解釈に違いがあり、square covered platformsが⑦⑧では「沢山ある」、⑨では「いくつかある」、と訳されている。この解釈の違いは、「構造物」の捉え方にも繋がる。詳しくは(**1.5.**)で確認するが、⑦高畑美代子氏はsquare covered platforms on scaffold polesを、多数の柱が連なるアーケードすなわち「コミセ」であると捉えた。⑧金坂清則氏は「火の見櫓」であると考え、a number ofを「多数」ではなく複数を意味す「幾つもの」という日本語に翻訳している。

1.5.「構造物」についての解釈

前項では、当該の「構造物」の描写について確認した。この「構造物」については、訳者／研究者らによって複数の説が示されている。代表的な説は、「こみせ」「祭り櫓」「火の見櫓」の3つである(**資料4**)。

前二者については、「火の見櫓」説を唱える金坂清則氏が否定的な見解を示している。まず、「こみせ」については、「この構造物は(中略)『こみせ』(雁木)であるはずもな」いと否定する6)。次に「祭り櫓」については、①日程、②建築構造、③数、の点から認めがたいと述べる。最後に「火の見櫓」については、①現存する消防屯所との構造的違い、②史料に描かれた火の見ヤグラとの構造的な類似、③町火消しのヤグラの高さや構造的な類似、④ヤグラの位置と数、の4点から仔細に検証し、妥当であるとする7)。

資料4)　諸説一覧　(引用文献中の傍線はすべて筆者加筆)

①こみせ説　(高畑美代子)

高畑美代子氏は、この「構造物」を「こみせ」であると断定している。

彼女は、また「こみせ」と思われる次のような記述をしている。「他の普通とは異なった特徴は二十から二十五フィートの高さの骨組みの柱に乗った沢山の屋根のついた四角いプラットホームがあることです。とても暑い夏の夜は、そこへ蚊から逃げ出すために、彼らの寝具を持ち込むのです。」(前掲書)それにしても、人々は「こみせ」の屋根の上に寝具を持ち出して寝ていたのだろうか。

これは、冷房のない時代に蒸し暑さを避ける良い手段であったかもしれない。十九世紀から二十世紀にかけて都市化が進んだ欧米でも、人々が暑い夜に外で寝ることはあった。都市の裏通りを描いたアメリカの「ゴミ箱派」と称される画家グループがいたが、その一人であるジョン・スーロン(一八七一－一九五一年)が描いたのは、都会の建物の上で夜寝ている人々の群れや路上で日なたぼっこする人々の姿だ。二〇〇〇年の上海では夏の暑い日の夜中に通りに折りたたみの寝椅子を出して家の前で寝ている大勢の人々を目にする。

現在に残る「こみせ」の写真には張り出した屋根の上に製造中の下駄を山積みにしたものがある。下駄の乾燥には屋根の上というのは好都合であったようだ。

それにしても、イザベラ・バードは西洋人のまなざしで日本人が思いもよらないような明治十一年の「こみせ通り」の姿を書いた。ただし、省略版である『日本奥地紀行』では、この部分は削除されたので、これまで彼女が「こみせ」について書いたことは知られていなかった8)。

②祭り櫓・火見櫓説　（伊藤孝博）

伊藤孝博氏は『イザベラ・バード紀行「日本奥地紀行」の謎を読む』（2010）において、「『櫓と四角いプラットホーム』の謎」という小見出しのもと、この「構造物」を詳細に分析している。「こみせ」説に疑問を呈し、「祭り櫓」、「火見櫓（櫓付き消防屯所）」、「ねぷたの山車」の3つの説を提示したうえで、可能性が高いのは「祭り櫓」と「火見櫓」ではないかと述べる。

バードは、黒石の町が他の町と違っている特徴として、次のような表現もしている（『完全版』）。

「20～25フィート（約6～7.5メートル）の高さの骨組みの柱に乗った、沢山の屋根のついた四角いプラットホームがある。とても暑い夏の夜は、蚊から逃げ出すため、そこに寝具を持ち込む」（別訳「（略）櫓に屋根付きの四角い台が乗っているものが沢山ある。とても暑い夜は、蚊に食われないよう、ここに寝床を持ち出す」いずれも趣旨を引用）

（略）バードがいう建造物として、「こみせ」を連想するのは自然にも思われるのだが、果たして断定していいのだろうか。彼女の記述には、「こみせ」にしては奇妙な表現が幾つか含まれているからである。

まず、この建造物は高さが6～7.5メートルあると明記されているのに対し、「こみせ」は家の1階の軒先の高さしかない。また「四角いプラットホーム」にせよ「四角い台」にせよ、この構造物は明らかに地面とかなり落差のある台面または“床面”を伴う印象を受けるが、「こみせ」の「しとみ」（屋根の下の歩行空間）は平石が敷き詰められているだけで、道路との落差はほとんどない。

さらに「高さ6～7.5メートル」、「落差のある床面」、「骨組の柱」、「四角い」を合わせれば、この建造物は平たく低い出屋根の列というより、「櫓（やぐら）」的な構造を伴うイメージではないか。

もう1つ、寝苦しい夏の夜に人々が寝具を持ち込む（または持ち出す）云々というのも、やや引っ掛かる。地元の方に聞いたところ、番台のようなものを出して涼むことはあっても、「しとみ」で寝る習慣などあったのだろうか、と疑問を呈するのだ。

バードはこの建造物についての記述の中で「沢山（多くの）」という形容を使っている。これが「屋根」を指すのか、「屋根の付いた四角い構造物」にかかるのか、必ずしも明確でないのだが、後者だとすれば、アーケードのように続いていたのではなく「この構造物が複数あった」とも読める。

「沢山」というこらには、2つや3つではないだろう。少なくとも4つや5つ以上なら、そしてバードが他の町ではそんなに見かけないものだったとしたら、「沢山」と表現しても不思議ではないと思われる。

そもそも、バードのいう構造物が「こみせ」（雁木）だとすると、彼女が雁木を見たのは、黒石が最初ではない。津川と新潟で目撃し、記録していた。その表現は、次のようになっている。

「道路全体の軒下にプロムナード（promenade)がある」（津川）。「冬になって雪が深く積もった時に屋根付きのプロムナード（a sheltered promenade)にするため、奥行のあるベランダ（verandahs)が通り沿いにずっと繋がっている」（新潟）。

「ベランダ」は、普通は屋根付きのポーチ（玄関先の入口部分）を指す。「プロムナード」を散歩道と訳そうが、その他のニュアンスで解釈しようが、いずれにしても通路である。バードが雁木のことを「軒先に続いている屋根付きのプロムナード」と明確に描写しているのであり、“櫓”（または骨組みの柱）や「四角」や「台」の要素などまったく登場しないのだ。黒石で見た特徴的な構造物の描写は、これが雁木（こみせ）ではないことを、強く示唆しているのではないか[9]。

伊藤氏は更に、「祭り櫓」か「火見櫓」か　との小見出しを付けて、次のように論じる。

以上の諸点を踏まえ、建造物の正体として考えられる幾つかの可能性を検討してみよう。

①木村商店（前町）の木村和弘さんによると、黒石ではかつて、「黒石よされ」（「ねぷた」と並ぶ黒石の代表的な夏祭り）の時に、仮設の祭り櫓を建てていた。町内ごとに設けた踊りと囃子の舞台で、20ヵ所以上あったという。そして四角く柱を組み立て、床台を乗せて屋根を掛ける構造も、高さも、バードの記述にかなり似ている。ここで関係者が夕涼みしたり、そのまま寝たことは、あり得るそうだ。

ただし「黒石よされ」は、「黒石ねぷた」（七夕祭。8月の第1週）が終わった後の8月半ばに行なわれてきた。「祭り櫓」が、明治初期の黒石ねぷたの期間中にも登場していたのかどうかは、定かでない。

②黒石の町には、火見櫓（ひのみやぐら）が幾つか残っている。火見櫓といっても単なるハシゴ付きのタワーの類ではなく、2階建ての消防屯所の上に小さな塔屋部分を乗せた、立派な建物である。高さも構造も、バードの表現に近い。

かつては消防組ごとにそれぞれの屯所があったといわれ、江戸後期から明治初期頃にかけては、5つの消防組があったようだ（山形町・元町・中町・鍛冶町・上町）。

「5つ」が「沢山」といえるかどうかがやや気になるが、それほど広くない市街地を散策して4つも5つもの立派な消防櫓を見かけたとしたら、バードが「沢山ある」と認識し、「他の町では普通は見られない光景」と感じておかしくないのではあるまいか。

黒石市教育委員会の鈴木徹さんによれば、江戸期以来、昭和の戦争前まで、黒石ねぷた（七夕）の運行を担ったのは消防組（消防団）だった。屯所の2階は20畳ほどの広さがあり、公民館的役割もあった。昭和期には青年団（消防団）の寄り合いや仲間の結婚式にも利用され、夏の盛りの「ねぷた」のころ、ここで涼んだり寝たことは十分考えられるという。

ちなみに黒石の町に現存する火見櫓（兼・屯所）は3つだが（最近までは4つ現存）、このうちの「黒石市消防団第三分団屯所」は青森県指定重要宝物となっている。数年前には、往時の火見櫓が現役で活躍している盛岡や伊東（伊豆半島）などの自治体が参加し、「火見櫓サミット」が黒石で開かれた。このタイプの消防櫓施設は、十分に「黒石を特徴付ける」要素の1つなのだ。ただし黒石の消防櫓は柱や構造の骨格を露出しておらず、「骨組みの柱」云々というバードの表現とやや合わない印象も残るのが難点かもしれない。

③鈴木徹さん自身は、バードのいう構造物が「ねぷたの山車」だった可能性も指摘する。しかしバード当時は人手による「担ぎねぷた」だった可能性が大きいと考えられており、仮に台車のようなものが登場していたとしても（バードの七夕見物の段に車の気配は全くないが）、そこで「涼んだり寝たり」するのは苦しいだろう。「屋根」と「床」のある「骨組みの柱」云々からも、「ねぷた」説は合わないように思われる。

こうして結局、決め手はないのだが、①の「祭り櫓」か ②の「火見櫓（櫓付き消防屯所）」の可能性が比較的大きいと考えられないだろうか。あくまでも本書なりの仮説である10)。

③火の見櫓説　（金坂清則）

金坂清則氏は、「こみせ」説については完全に否定し、「祭り櫓」説も可能性が低いとする。その上で、地元の研究者の協力による緻密な考証を通じて4つの根拠をもとに、構造物は「火見櫓」であると考えた。

この構造物について伊藤孝博氏（第六報注17）は「黒石よされ」の時の仮設舞台か火見櫓（櫓付き消防屯所）のどちらかだろうとするが、訳者は篠村正雄氏のご援助を得ての考証の結果、後者だと考える。この構造物は伊藤氏がこだわって検討して否定する「こみせ」（雁木）であるはずもなく、「黒石よされ」説も、日程的、建築構造的に合わないという以外に、仮にあったとすれば、多くなりすぎる点で認め難い。伊藤氏はバードがこの構造物が多いと記していると解して火見櫓説の弱点とするが、これは時岡敬子訳（第十二報注2）の誤りに基づくからであり、原文は“many” や“a lot of” ではなく“a number of” であり、「いくつかの」の意と解すのがよい。次に、日程的には「黒石ねぷた」の時期であるが、当時のねぷたは「担ぎねぷた」なのでこれであるはずもなく、たとえ山車があったとしても、構造的には相容れず、認められない。またねぷたを作る小屋の可能性については、『図説　青森・東津軽の歴史』に収められた写真が示すように、中空のその構造はバードが記すものとは相容れないし、ねぷたの大きさからしても認め難い。他方、享和元年（一八〇一）に誕生し、天保年間（一八三〇－四四）には町方組織に組み込まれた五つの火消組（黒石市史編集委員会編『黒石市史　通史編Ⅰ』黒石市、一九八七）が明治三年に三つの組に再編され、各組が半鐘櫓を建設している（篠村元次郎『黒石消防史』一九五二）。

この半鐘櫓がどのようなものであったかは定かでないものの、①現存する消防屯所の一つが大正一三年の建設になり、他の二つの構造もそれに類似するが、この構造がバードの記述と異なり柱が見えないので、明治八年に創建された半鐘櫓の構造はそれとは異なっていたと考えられ、②火消組についての根本史料である「分銅組若者日記」中の文久二年（一八六二）の大火に係る町絵図に描かれた火見櫓について、それが複数の柱に支えられ、かつ上部に屋根と床がある構造のものであり、かなり高いものであったこと、つまりバードの記述を満たす構造を有していたことがわかるからである。しかも、③黒石の火見櫓や火消組が江戸のものに学んで設けられたことと、火見櫓の高さが最も重要な定火消しで三丈＝約九メートル、大名屋敷の櫓で二丈五尺＝約七・六メートルであり、町火消しの櫓がそれより高くはなかったものの特に低くもなかったことからすると、バードが記す構造物とは高さの点でも符合するし、江戸には柱が露出しかつ屋根と床をもつ構造の火見櫓があった。また、④町絵図に描かれた櫓の場所が明治七年に建設された三番組の半鐘櫓の場所に合致することから、この櫓がバードが泊まった宿から西に五〇〇メートルに位置することになるのみならず、あとの二つが宿の北一〇〇メートル強の南東方向五〇〇メートルに位置し、かつバードがここを訪れていることから、三つあった火見櫓をすべて見ていたと考えられ、したがって「いくつか」あるという記述と符合するからである11)。

1.6. 従来の説の問題点

以上のように、バード研究者たちにより複数の説が示されている。しかし残念なことに、**資料4**で挙げた諸説**①②③**ともに“to be out of the way of mosquitoes”という住民による重要な証言を、手掛かりの一つとして全く考慮に入れていないのである。実は、この「蚊から逃れるため」という説明のもと、高床建物（ヤグラ）を組んで寝泊まりする習俗が、バードが滞在した当時の津軽地方において、盛んにおこなわれていた。次章では、この習俗について検証する。

2. 青森県津軽地方における寝宿の習俗とヤグラ

バードの描写に登場する「構造物」とは何か。結論からいうと、若者集団による臨時的な寝宿の一形式である可能性が高い。このことを証明するため、本章では(**2.1**)従来の研究成果に基づき、村落における若者集団の機能と、その活動の拠点となる「寝宿」との関係を確認し、(**2.2**)寝宿としての高床建物(ヤグラ)の利用の実態と、それがひとつのスタイルとして一般化していたことを明らかにする。以下、ヤグラを拠点とする若者集団の臨時的な寝宿を、仮に「ヤグラ式寝宿」と呼ぶ。

2.1. 寝宿の習俗と若者集団についての研究

2.1.1. 若者集団

往時の共同生活において、人々は複数の集団に所属していた。例えば、行政的な集団(村、字、部落)、地域的な集団(クミ、カイト)、同族の集団(カブ、マキ、イツケ)、講や座(信仰、経済)などである12)。そして年齢に基づく集団(子ども、青年、成人、老人)にも分属する。特に同じ年齢の者同士には、目に見えない連関があると考えられ(同齢感覚)、たとえば「同い年の者が亡くなると、餅を作って耳にあてる」(耳塞餅)といったまじないは、不幸が同齢の者に及ぶことへの恐れに由来する13)。こういった、目に見えない繋がりが強く意識される年齢集団のなかで、各地に広くみられ、集団としての性格がとりわけ強いものが、若者集団(青年集団)である14)。

若者集団は、一般にワカイシュ、ワケェシュ、ワカモノ、ワッカモン、ワカモノナカマ(若い衆、若衆組、若い衆組、若衆仲間、若い者組、若者連中、若者仲間、若連、若組)などと呼ばれ、地域性のある呼称としては、東北地方ではワカゼ(若勢、若勢団、若勢連中)やケイヤク(契約、若者契約、若衆契約)、九州南部では、ニイセ、ニサイ、ニンセイ(二才、仁才、二才組、二才衆、仁才組、兵児二才)などが挙げられる15)。

2.1.2. 若者集団の機能と分類

若者集団が持つ役割と機能については、さまざまな捉え方がある。関敬吾は①警防・修養団若者組、②宮座祭祀団若者組、③獅子舞い若者組、④契約若者組、⑤労働団若者組、⑥同年講の若者年齢の段階、の6つを挙げる16)。牧田茂は、①祭礼、②消防、海難の救助、③夜業仕事の場、④ヨバイの基地、恋愛教育機関を挙げる17)。平山和彦は、①信仰行事、②民俗芸能、③村仕事、④婚姻関係、⑤制裁、⑥その他の6つに分類する18)。竹内利美は①祭礼の執行、②村行事・祭祀行事の執行、③村の警防、④共有漁場・共有林の管理や共同作業の下請け、⑤農作物の見回りと農休日の監視、⑥集団的訓練、⑦学習活動、⑧婚姻の統制の8つを挙げる19)。

こういった機能あるいは組織性の有無や強弱により、若者集団は2つのタイプに分けられる。一つは、ムラの組織に位置づけられ、多くの機能と役割を負うタイプである。いま一つは、機能の一部を持つが組織的な位置づけはなく、素朴な親しみの感情によって繋がり、仲間同士の交流を楽しむことが主な目的であるタイプである20)。若者集団に2つの傾向(タイプ)があることは、有賀喜左衛門『日本婚姻史論』(1948)、内藤莞爾「年齢階級－特に漁村の若者組－」(1952,社会学評論8)、関敬語「年齢集団」(1958,『日本民俗学大系』3)、桜井徳太郎『講集団成立過程の研究』(1962)、瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』(1972)などの研究によって指摘されてきた21)。瀬川清子は、「婚姻をもって終了する若者組は、未婚から既婚への自然の生長を助長育成する意味がつよく、若い仲間の間には微妙な不文律があったとしても、それを規約につくったり成文化する必要がなかった。規約をつくったり成文化する必要が出てくるのは、他になにかの任務をもったからではないだろうか。つまり脱退年齢が30歳・40歳に及ぶものが多いということは、若者自身の社会教育や婚礼のためばかりではなく、若者組が部落社会の一角に独立していて、なんらかの任務を果すものであったからであろう、と考えられるのである」22)と述べ、加入脱退の儀礼、規約などを設け、年齢階層的な秩序に従って役割や任務を負う集団と、同じ年頃の者たちが、生活技術、処世、婚姻などを学び、身につけ、仲間同士の親しみによってつながる程度の集団とを、機能的・構造的な差異に基づいて区別し、前者を「若者組」、後者を「若者仲間」と呼び分けることを提案している23)。

一方、ムラにおける両者の存在の様態に着目すると、桜井徳太郎が指摘した「二重構造」(若者組と若者仲間の重層的な併存)や、混淆がみられる。平山和彦は、この視点を機能的構造的区分に加え、若者集団をABCD、4つの型に分けた24)。**A**型:未婚者を中心とした集団、寝宿を持ち婚姻の媒介あるいは婚礼への参与、娯楽を主たる機能とし、年齢階梯制がゆるやかで組織性の点では緩やかな、いわば若者仲間とでも称すべき不定型なタイプ　**B**型:既婚者・壮年層を含み、共同労働や祭祀への奉仕活動あるいは警防、災害救助などの労働を主たる機能とし、規律が厳しく年齢階梯制が発達して組織度も強い定型的なタイプ　**C**型:ABが役割を分け合い、重層的に併存する状況(二重構造)　**D**型:ABの機能が混合した状況。以上の4つのタイプ、である。もちろんこういった分類は便宜的なものであり、平山は「若者組一般の機能を体系的に把握するのは必ずしも容易ではない」と述べ、村の組織の一環として位置づけられるもの、網主経営の一部に含まれるもの、寝宿中心の小集団が分立するが村全般の組織とは関係の薄いものなど、村の構造面から機能を見る必要性があると同時にそこに困難もまたあること、更に婚姻や婚礼の慣習への関わり方も一様ではなく、婚姻史という重大な問題との関係においても、諸事情が未分化の状態にあることから、個々の事象とを区分・整理し理解し位置づけることが容易ではないことを指摘している25)。

2.1.3. 若者集団と宿

若者集団が上述の機能と役割を果たす拠点となる施設が「宿」である。宿には男子の「若者宿」「若衆宿」(タマリ、マワリヤド、トマリヤド、トマリヤ、ネベヤ、ネヤ、ネンヤ、ネヤド、デワカ)26)、女子の「娘宿」「めらし宿」(メラシヤド、ムスメヤド、オンナヤド、コメラベヤド)、そして男女合同の宿があった。一つの村に男子の宿と女子の宿が併存する場合もあれば、男子の宿だけがある場合もみられた27)。これらは、性別による区分と呼称である。また、宿の機能から、集まって夜業仕事をする「仕事宿」(オウミヤド、イトヒキヤド、イトヤド)28)、飲食や夜遊びに興じる「遊び宿」(アスビヤド、アソブヤド)29)、宿泊施設としての「寝宿」(トマリヤド、ネド、ネンヤ)といった呼び方がある30)。

一方、宿として利用される建物(空間)に注目すると、①独立した専用の建物を持つ場合と、②建物の一室を間借りする場合2タイプがあった31)。①には、作業小屋や村の会所などを宿とするものがみられ32)。掘立てや土室、藁小屋、ヤグラなどが用いられた33)(**2.2.**参照)。②は、各戸が住宅の一部を融通するもので34)、有力者の家や、気楽に出入りできる家格の低い家、若者頭、仲間の家などの輪番的利用がみられた35)。そして女子集団の宿(娘宿)の多くはこのタイプだった36)。

また、建物の持続性(時間)に注目すると、①常設の宿と、②臨時の宿があった37)。竹内利美の区分と説明38)に従うと、①常設の宿には、有力者の個人宅や、気楽に出入りできる家格の低い家、若者頭や仲間の家が用いられ、村で共同の宿を持つ場合もあった39)。そして、祭礼の執行、行事(神社や村の年中行事)の担当、警防、共同漁場や共有山の管理、共同作業 、農作物の見回り、農休日の監視、集団での訓練(一人前にする教育)、学習、婚姻の統制:婚姻調整、といった機能を持った。②臨時の宿には、農閑期(冬期)の共同作業場(仕事宿)、芸能伝習の合宿(神楽宿・小宿・若宿)、冬期の防火、夏期の野荒らし防止(詰所宿)、夏に仮小屋を建てて寝泊りしたり談笑したりする場(寝宿、遊び宿)などがあった40)。

2.2. 各地の「ヤグラ式寝宿」の事例

以上のように若者集団には若者組と若者仲間の2タイプがみられ、宿には性別や目的別の分類や呼称があること、仮設・臨時的なものと常設・恒常的なものがあることなどが明らかにされている。しかし、「臨時的な若者宿は、案外に注意されないできたようである」と竹内利美が述べているように41)、夏季の臨時的な宿の一形式であると考えられる「ヤグラ式寝宿」も、個別的・断片的に諸々の研究書や報告書で触れられることはあっても、広域的・体系的な研究や報告は少ない42)。そこで、本節ではあらためて各地の「ヤグラ式寝宿」のデータを収集し、これが若者仲間の寝宿の一形式であることを確認する。(以下、引用文中の傍線はすべて筆者加筆)

2.2.1. 九州地方のヤグラ

①鹿児島県川辺郡笠沙町(現・南さつま市)

鹿児島県の緊急民俗調査によると、若者宿である「ニセ宿」の他、青年ゴヤ・ヤグラで寝泊りする例もあったという43)。たとえば、鹿児島県川辺郡笠沙町姥では、ヤグラを組んだり、部落の家々を輪番制で借りたりして「ニセガイヤ」(若者宿)とした44)。

②鹿児島県垂水市柊原

鹿児島県垂水市柊原では、浜に設けた涼み台のことを土地ではヤグラと呼び、夏の暑さを避け、寝泊まりした。「浜には蚊も少なく、心地よい風が吹いて、家よりはずっと過ごしよかった」というから、暑さや蚊を避けられるメリットもあったようである。

このヤグラは、青年団または家ごとに作られ、丸太を組んだ高床の上にはワラやカヤを敷き、稲わら葺きの屋根をかけ、階上には丸太を伝わってのぼった。1958(昭和33)年に撮影された写真(小野重朗撮影)には10人近い少年たちに混じって成人男性(写真の説明に成人の男性である旨の説明あり)も涼んでいる様子が窺える。垂水市は葉たばこ産業が盛んであり、夏季に家の中に葉を吊して乾燥させると、室内の温度が上昇し、また葉から虫やゴミなどが落ちてくるなど不快であるため、このヤグラに退避して夜もここで寝たという。添付される写真には「涼み台 1958(昭和33)年、小野重朗撮影、鹿児島県垂水市柊原」というキャプションが付されている45)。

また、桜井徳太郎(1968)の口絵ページには、「若ものとヤグラ」と題して上記小野重朗撮影による別アングルの写真が掲載されている。写真には「夏の暑さを避けるために海辺にヤグラを組み、涼みながら楽しく語り合う」という説明が付されている46)。

③長崎県大村市

長崎県大村市の集落では、夏にヤグラを建て、夜はそこに集まって藁仕事をしたという。この臨時のヤグラの生活にも若者頭があった47)。

④熊本県

緊急民俗調査(昭和37年以後)に「ヤグラに泊まった」ことが報告されている48)。

2.2.2. 四国地方（高知県）のヤグラ

高知県西南部の幡多（はた）地方[49]には寝宿としてのヤグラが多数存在した。この地方のヤグラには2タイプあり、一つは藁葺きの臨時的なもの、いま一つは瓦葺きの恒久的なもので、前者は中村市（現・四万十市）以北、後者は中村市以西に多かったという[50]。

①高知県幡多（はた）郡黒潮町（旧大方（おおがた）町）

『大方町史』に「若い衆（若連中）とやぐら（櫓）」というタイトルで以下の記述がある。

「明治の末期にいたる頃までは、農民部落の中にはいわゆる『やぐら』と称する、一種特異な簡易建造物が見かけられた。その使用目的には当時の若い衆の生態の一面を物語るものがあった。（中略）男子が年頃になって若連中に加入するようにもなると、（中略）同志が話し合って、どこか隠居部屋の空いたものとか離れとかを物色し、主人に請うてそこに集って寝泊りをした。これを“若い衆の泊り宿”と称した。ところが冬季はそれでよいが、夏になると暑さと蚊の襲来を避けるために、自由で清爽な『やぐら』を思いついたのである。／『やぐら』の構造は何れも大体一様で、先ず大きな丸柱四本を掘っ立てとする。その柱の四・五米位の高さのところに床を造りむしろを敷く。屋根はわら又は竹がわらをふいた。四方に壁はなく吹き通しで、時にはわずかに竹の荒いすだれを下げて雨の吹き入るのを防ぐ程度だった。夜間は冷えるのでふとんなどを持ち込んでざこ寝をする。宵には松火をたいて縄をなったり草履を造ったりし、夜更けにもなると寝ていてもこそこそと抜け出して、娘のところに夜ばいに出かけたものである。このような習性が、時代のテンポと共に風紀上からも批判されるようになり、明治四十年前後を境として、いつとはなしに廃絶した」[51]。

②高知県宿毛市山奈（やまな）町芳奈（ちようよしな）

山奈町芳奈にある泊り屋は、建物が現存し、国の文化財指定を受けていることから比較的よく知られている。中山太郎『日本若者史』（1930）では「先年、柳田國男先生が、高知県の西部地方を旅行せられた折には、村村の田圃の中に寝宿があつて、牀下（ゆかした）は人の丈ほどあり、外形は南島の校倉（あぜくら）などに、やゝ似てゐたさうである」「高知県六郡でも早く滅び、西部の幡多郡にのみ多数残存しており、1906（明治39）年に同地方を視察した際に目撃された10ケ村にわたり残存していた、その理由は愛媛県南部の影響で、宇和郡だけでも大正5年に男子の寝宿33、女子30、男女共同21箇所あったという」[52]と紹介されている。

有賀喜左衛門は『日本婚姻史論』（1948）で寝宿の一例として芳奈の泊り屋について次のように紹介している。「高知県幡多郡山奈村にも若者宿があつて、トマリゴヤと称し、以前は校倉式の床の高い藁葺の小屋もあつたらしいが、現在ではその瓦葺の大きなものが残つてゐる。これに寝泊りする者は未婚者のみであり、結婚すれば宿を脱退する。如何に年をとつても未婚者である限り宿を脱退することは出来ない。昭和九年秋には五十歳以上の者も居たが、この者は体が悪くて嫁の取れぬ人であつた。又結婚せぬ者を半人前として一種の軽蔑を以て見る風習である（野口孝徳氏）。又幡多地方には明治三十九年には多数の寝宿の残存したこ事や、北宇和郡では大正五年に女子の寝宿三十ヶ所、男子のもの三十三ヶ所、男女同宿のもの二十一ヶ所あつた事など報告されてゐるが（日本婚姻史一四九頁）その慣習に就て詳細を知る事が出来ない」[53]

大間知篤三は、1958（昭和33）年の著作で寝宿について常設／臨時の別や専用／間借りの別などを説明するにあたり、「高知県幡多郡でヤグラとよばれる若者宿などは、若者専用の建物であったが、これは例外的存在であり、通例は村内の民家の一部を借りて使うのである」[54]と幡多郡のヤグラを引き合いに出している。

牧田茂も、『人生の歴史』（1955）,「年齢集団」（1958）において、それぞれ「高知県幡多郡などでは、トマリ小屋とかヤグラとよばれる床下のずいぶん高い建物」があること[55]、「トマリ小屋とか、ヤグラとか呼ばれる、床下の高い、南島にあるような校倉式の建物が、村々の田圃の中や、道路の端などにたくさん建っていたのを、明治の末年にこの地方を旅行された柳田先生が見ておられる」と述べる[56]。

このように、早くから年齢集団の研究に付随して社会学や民俗学の分野で注目されていた芳奈の泊屋は、1957（昭和32）年6月3日に重要有形民俗文化財に指定された。芳奈の浜田、下組、道ノ川、靴抜の4つの地区に独立した専用の宿があり、このうち浜田の泊屋のみが指定を受けた。指定の理由として、単に形式が珍しいということだけでなく、現にこれを若者宿として使っているという点で価値を認められたという[57]。

指定と前後して、昭和30年代から観光資源としても注目され始めた。高知市と観光協会が発行した『新土佐物語』（1955）では、寝宿のことを「トマリ小屋」といい、ヤグラと通称されていること、土地の若い男女が集まる場所であったことなどを詳しく紹介している。同書によると、寝宿が多い愛媛県南部の影響で幡多地方には寝宿が多く、1906（明治39）年ごろでも10ヶ村もあったという。なかでも芳奈（宿毛市）は4つの小部落それぞれに泊屋があった。4つの泊屋のうち「浜田の泊屋」が最も立派で、床上の高さ2m40㎝、明治7年ころはすべて藁葺きで雨戸もない粗末な建物で「夏だけ寝泊りしていた」といい、数え年15歳から結婚までは、このヤグラに泊まる義務が課せられた。現在見られるものは明治14～15年頃建てられ、瓦葺きとなり、1914（大正3）年頃に改築しものだという。ヤグラには梯子で出入りし、室の広さは約6畳で畳敷き、四方に手すりと雨戸が付属する。「現在電灯も引き部屋には夜具のほか柔道着や拍子木などが目につき、一つの泊屋に七、八人の青年が毎日泊つている」という記述

から、1955（昭和30）年当時もまだ若者たちの宿泊所としての機能が失われていなかったようである。この地区の青年は、泊屋を中心とする「若い衆組」と同時に「青年団」にも所属し、夜警、祭の役者、教育などの役割を負っていた58)。

指定により知名度も上がり、NHK高知放送局が出版した『土佐路のはなし』（1965）では「宿毛市が全国的に珍しがられている重要民俗資料」（ママ）と紹介されている。同書によると、「この建物も、その生活も、もともと全国的に、特に瀬戸内と九州の海岸地帯なら、いたる所に見られたもの」で、「若い衆組」に加入してから結婚するまでここで寝泊まりしたという。ヤグラは女人禁制で、ムラの警防の役割を持ち、泊屋の近くには必ず「力石」が転がっていたという59)。恐らく、文化財指定を受けた昭和30年代から40年代にかけてヤグラそのものでの寝泊まりは行われなくなったと思われ、瀬川清子は『若者と娘をめぐる民俗』（1972）で「九州には未婚の男子仲間の青年ゴヤ・ネゴヤと称するものが多かった」が、「四国の高知県の常設の櫓なども若者のネゴヤであったが、今では公民館に泊まる」と述べている60)。口絵写真ページには幡多地方のヤグラ形式の泊屋2棟の白黒写真が掲載されており、ひとつは浜田の泊屋（昭和46年2月21日付「毎日新聞」の転載）、2枚目は「芳奈の泊り宿」、3枚目は「高知県中村市秋田の泊り宿」という説明が付されている。

建築の面からもヤグラは注目された。竹内芳太郎1986『野のすまい』では、独立した専用の建物を有した若者宿の1例として、浜田の泊屋が取り上げられている。瓦葺きの入母屋屋根の部屋の隅に穴があり、梯子で上り下りできる構造になっていて、「どうしてこんな高床構造があるのか、その理由はついに明確ではありませんが、この地方は時々川がはんらんしたことがあるので、住宅はみな屋敷を高く盛りあげているという事情から、何か理由の手がかりがつかめそうにも思います」という見解を述べる61)。竹内が訪れた1980年代なかばの時点で、この泊屋の部屋の隅には、夜具や衣類、一升瓶などが置かれ、「若い者たちのたむろしていそうな体臭が感じられました」「夕食後青年たちは集まって、酒を飲むとはいわなかったが、火の番をしながら、みんなで歌をうたったり、夏の夜など尺八を吹いたりしていると、とても気持がよいと、案内の青年は話してくれました」と記していることから、瀬川清子の報告と併せて考えると、宿泊所としての機能は失われていたものの、まだ集会所として現役であったことがわかる。しかし、若者の数が減ってきており、集団としての活動ができなくなることの不安が、この当時すでに若者の口から出ていたようである62)。

③高知県中村市（現・四万十市）

瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』に「高知県中村氏秋田の泊り屋」を撮影した写真がある。同じ幡多郡の芳奈の泊屋と比較すると幾分華奢な構造で、屋根は藁葺きとみられる。田圃沿いの川端に建てられており「氏神を中心とした氏子ごとに一つの櫓がある。一部落に二つの氏神があるときは、櫓も二つある」63)。

④高知県安芸郡室戸町（現・室戸市）

瀬川清子によれば、高知県内では常設のヤグラを持つ地方（上記高知県南西部方面）がある一方、室戸町地方では、夏になると若者が部落内にひとつずつスズミヤグラを作ったという。これは仮設・臨時のヤグラである64)。

2.2.3. 東北地方のヤグラ

青森県の事例は別項を設ける。福島、秋田に、寝宿と関連するヤグラの報告がある。

①福島県大沼郡新鶴村（現・会津美里町）

「夏季は櫓を作る者もある。若者時代には家の勝手か中の間あたりにやすむ」という証言がある（1946（昭和21）年に採録）。寝宿との関連において夏季に臨時的に作られるヤグラのことが語られている65)。

②秋田県鹿角郡大湯（現・鹿角市十和田大湯）

牧田茂は1951（昭和26）年の著書『生活の古典－民俗学入門－』（1952）のなかで、「夏、若い衆の寝るヤグラ」と題した写真とともに報告している。そこには、四本柱の垂木を組み、筵で四方を覆った建物が写っていて、「夏は高いヤグラを組んで五、六人ずつ集まった青年が寝泊りしたものだそうで、今でも子どもたちがその習慣をひきついでやつております（口絵写真参照）」66)と述べている。この見聞はその後の著作でも紹介され、たとえば『郷土研究講座』（1958）では、「筆者も先年秋田県大湯町付近で、柱を組んでムシロでかこったヤグラが、点々と道傍や畠の中にあるのをみた。いまでは、子どもたちが寝泊りしているこのヤグラも、もとは青年たちの夏の寝宿であったことがわかった。以前、この地方では、冬の間は、雪の中にカヤでふいた小屋を設けて寝宿にしていたのであって、そのことをヨラッコと呼んでいた」67)と記し、同じヤグラを写したものと思われる別カットの写真が掲載されている。この、「夏、若い衆の寝るヤグラと村の娘（秋田県大湯町付近）」と題した写真にはムラの娘達の姿が写っており、「ヤグラやヨラッコは、娘たちが水汲みにくる村の泉の傍に設けられることが多かったというようなほほえましい話も、その際に聞いたことである」と記されており68)、このヤグラが異性との出会いや交流、品定め等を念頭に置いて設置場所が選定されていることが窺われる。同様の話は、牧田茂『人生の歴史』（1965）にも収録されている69)。

「秋田県大湯町付近では、今でも夏になると柱を組んでムシロでかこったヤグラが、道傍や畠の中に立って、こどもたちの寝泊りする場所になっているが、もとは青年たちの夏の間の寝宿だということだった。冬になると、雪の中に茅でふいた小屋を寝宿

にしたものだそうで、そのことをヨラッコといっていた。ヤグラやヨラッコは、娘たちが水汲みにくる村の泉のそばにつくることが多かったという話を聞いて、（中略）ほほえましく感じたものである」

瀬川清子も1972年以前に同地で複数の話を聞いている。大湯丁内（十和田大湯字大湯）の76歳の男性は、「夏には若い者が立木を利用して櫓をつくって泊ったが、蚤がいなくてよい。ヨガ（蚊）はいぶした」70)と語る。このあたりでは若者仲間のことをホベアッコ（朋輩ッコ）と呼んだ。「大湯中通（なかどおり）」（十和田大湯字倉沢中道付近か）の男性は、同輩をホベアド（朋輩ァド）と呼び、「ホベアドは五月あがりから夏中、樹の枝の上に櫓を組んで寝泊りをし、九月から四月まで、冬の間は藁や粟殻でヨラコを建てて、そこに寄って藁細工をする」のだという71)。

瀬川はこれらの聞き取りをもとに（秋田県鹿角郡では）「夏になると立ち木を利用して梯子で上り下りするほどの筵張りの櫓をつくって、若者が泊まったり遊び場にしたりした。同郡大湯村・曙村などでは、五月あがりから夏中は木の枝の上に櫓をくんで寝泊りし、九月から四月まで冬の間は、藁や粟がらでヨラコをたてて、そこに寄って藁細工をして泊まる。若者は櫓やヨラコに寝泊りするから、めいめいの家には若者のやすむ室というものはなかった、という。雪に埋もれる北の国でも、それなりに若い者の工夫と行動力があって、それぞれの家の外に出て、自由をたのしむ青春の園をつくり出していたのである」とまとめている72)。

参考）宮城県仙台市　（子供組の事例）

宮城県仙台市では、子供組によるものではあるが、七夕行事の一環として川原や堰のそばといった水辺に、稲杭などを使って小屋やヤグラを建てて寝泊まりしたという。この習俗は昭和50年代末までみられた73)

「七夕の前に川原や堰の傍らなど水辺に、子供たちが稲杭などを使って作る小屋や櫓」（傍線加筆）を七夕小屋といい、「小屋に七夕の竹飾りを立て、竈を築いて煮炊きをし、七夕さまに供物を捧げて小屋に泊まる風習は県下各地にあった。実際に小屋を作り籠る風習は戦前に廃れたが、民家をヤドとして子供たちが泊まることが戦後もなおしばらくの間、鳴瀬川上流域では行われていた」（傍線加筆）という74)。また、秋には「カランコ焼き」と称して藁葺きの仮設の小屋の中で煮炊きをして2～3日寝泊まりし、小屋は焼いたという75)。

2.2.4. 青森県内のヤグラと特徴

①木造付近（現・つがる市木造）

『外濱奇勝』(菅江真澄1796)に、木造付近で目撃されたヤグラにまつわる習俗が記録されている（寛政8年7月3日：1796年8月5日）。この記録は、文字によるだけでなく、挿絵も添えられている点でも非常に貴重である。島のように点在する村々に、ヤグラが高く聳えている。イザベラ・バードが黒石の城跡からみた“a sea of rice, with islands of wooded villages”はこの真澄の描いた風景に重なる。時代は異なるものの、まさにバードが見た“a number of platforms”（いくつかの／たくさんのヤグラ）の光景を彷彿とさせるものである。

菅江真澄は、「山より畑より帰りくる女、いひくひくれて蚊遣たくころ、大鼓とうとううちならすは、いづこならんと見れば、蚊を避くとて、高き木の枝にあなゝゐをゆひあげてのぼり、わかき男ら、つづみ、笛にはやしけるに」（以下略）と記す。（現代語訳「夕方になって、女たちが、山や畑から帰ってきて食事が終わり蚊遣火をたくころ、太鼓をどんどんうちならしはじめた。どこかとみると、蚊を避けるためといって、高い大木の枝に足場をつくってのぼり、わかい男たちがそこで太鼓や笛ではやし、口琵琶というものを吹きあわせて遊んでいる」傍線加筆76)）

蚊遣りたくころ、すなわち夕方、若者たちが高い木の上にヤグラを組んで登り、そこで太鼓を打ち鳴らし、笛を吹いている様子が記されている。

挿絵を見ると、手前のヤグラはまさに詞書にあるように、立木を利用して組まれたヤグラである。一方、右手奥のヤグラは、樹木が描かれておらず、立木を用いずに垂木を4本組み合わせて作られたヤグラである。左手奥のヤグラは、樹木をよりどころとして、垂木を組み合わせたヤグラのように見え

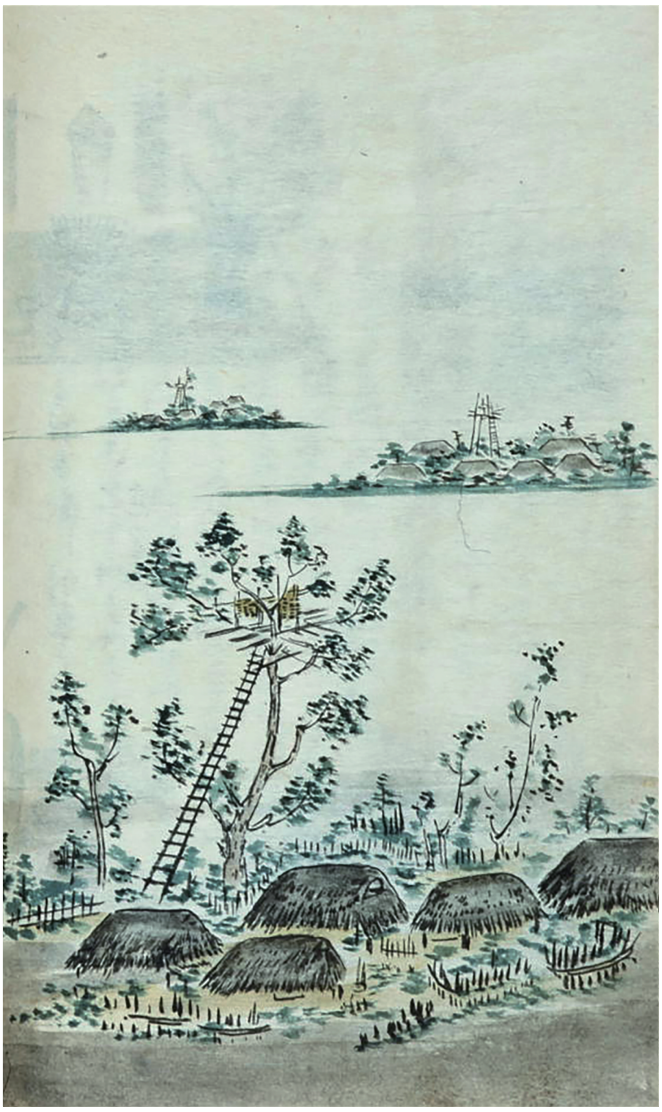

図1『外濱奇勝』（重文・青森県立郷土館蔵）

る。つまり、やぐらの組み方には①立木のみを利用したやぐら、②垂木のみで組まれた4本柱のヤグラ、③立木を利用して垂木を組み合わせたヤグラ、の3種類があったと推察される。

②南津軽郡田舎館村　（明治20年代後半）

明治10年生まれの男性の手記（「昔の農村」）によれば、明治20年代後半ころの夏、床下13尺(約4m30cm)以上あるヤグラで友人たちが寝泊まりしたことを記録している。ヤグラは友人の自宅敷地内に建てられたもので、苫葺きの屋根を付け、蚊帳を吊して夏の間はそこが若者仲間の寝宿になるのだった。入れ替わり立ち替わりの訪問客があり8人くらいが寝泊まりしていた。三味線を弾いたり、太鼓を叩いたりして楽しく過ごしたようである。

以下、記録の原文を記す。

「A君はこの年盆前に 自分の邸に長い垂木を組立てて櫓を建てた　床下十三尺以上も高くし屋根は苫を以て張り　南の方には荒い葺簀を張り蚊帳を吊して寝るのだ　辿も涼しいものだ　彼は朋友（けやぐ）四人でこの櫓に泊っていた　十五日　十六日とだんだん休んで暮してゆく　年少の彼はいつも一番先に寝る　眠ってしまう そうすると　朝に目が醒めてみると　櫓に八人位は寝ているのだ 毎晩のお客さんには驚いた

十九日の夜であった　彼は櫓の上で涼んでいると　十文字の方で頻りに唄が聞えてくるのだ　手を打ち囃子の声　それは相当に人数が集っていた　踊りも知らず唄うも出来ない彼は見物人の群（たまり）に入って見物をしていた　その内に他村若者処女（めらはど）が来ては踊る（略）（翌二十日） 午後の三時頃になると とうと(う)雨になった 強い雨ではないが日暮れの頃になっても晴れない 夕飯を食べてからは だんだんと雨量が加わるのみで これだと踊るどころの話でない　櫓の上で休んでいると 三味線や鼓を持った若者達から遊びに来て　三味線を弾いたり鼓を敲いたりするのを聞いていた」77)

図2　『青森函館画談』（函館市中央図書館蔵）

③青森郊外　（1877-1887ころ）

『青森函館画談』(1879頃)によると、明治10年代初頭の話として、青森の在方では高さ1丈2尺(約4m）以上の高さにヤグラを組み、蚊帳をつるして家族一同が起居する風俗があったという。自宅が不潔でノミに苦しむために、自宅を離れて「ヤグラ」で生活していたというのである。「家毎に」という表現から、この習俗が村々の各家でおこなわれていたことがわかる。主体が家族であり、「家毎」の習俗であるという記述からは、若者宿ではないとも考えられるが、動機や機能、構築物などの共通点に注意すべき事例である。

イラストを見ると、母屋の脇に聳える2本の樹木を利用して屋根付きのヤグラが組まれ、屋根の下に蚊帳が吊られている様子がわかる。ヤグラに登るための梯子が掛けられている。　（本文）「青森在ニテ見ル　家毎ニ大木ヲ木ダテニ承リ綱結ヒニシテワラニテ家根ヲフキ作ル　高サ一丈二尺以上　本家ハ不潔ニシテのみニ苦ム故　家内残ラズコレニ住ストナリ日中ニテモ蚊帳ツリバナシ」78)

④東津軽郡平内町　（明治40年代～大正初期）

『平内町史』(1977)によれば、東津軽郡平内町山口の明治35年生まれの男性は、子どものころ、屋外にワラ屋根の付いたヤグラを組み、集まった若者たちとともに寝泊まりした。かつてはより盛んにおこなわれていたという。「夜蚊がでるころ」という記述から、このヤグラと蚊との関連性が示唆されている。夏場は「ヤグラ」で、それ以外の基本的な拠点は「マギ」であった。

「当時、嫁をもらう前の若者のほとんどが、仲間の所へ泊りに行き、自家で寝ることは少なかった。若者の溜り場はマギであった。マギはイナクバ、マヤの天井裏で、干草やわらを収納する物置である。／夜蚊がでるころは、外にヤグラを組み、わらで屋根を葺き、そこで寝泊りした。この風習は昔はもっとさかんだったらしい」（本堂新司氏・明治35年生）79)

⑤つがる市車力町（旧北津軽郡車力（しやりき）村）　1930（昭和5）年ころ

『車力村誌』(1973)によれば、北津軽郡車力村では、昭和5年ころ、村内の随所で「蚊除けのヤグラ」がみられた。若者たちが仲間同士で4～5mの高さがある四本柱のヤグラを建て、旧暦の五月節供のころからお盆過ぎまでの間、そこに寝泊まりしたと

いう。「昭和五年頃、村内のあっちこっちに見られたが、旧五月五日（節句）の頃から、旧盆過ぎまで、若者たちが、組を作り屋外に四本柱の高いヤグラを建て、そこに起居する風俗があった。この高さは四、五メートルもあった。これは原始時代の水上生活や、南方土人の樹上生活によく似ている」80)

⑥五所川原市金木町嘉瀬（旧北津軽郡嘉瀬村）　（1931年）

昭和6年7月、北津軽郡嘉瀬村毘沙門地区（現・五所川原市嘉瀬）で撮影された「ヤグラ式寝宿」の写真である。地元紙「東奥日報」に掲載されたもので、不鮮明ではあるがこの習俗を撮影した戦前の写真は、恐らく全国的にみても非常に貴重であると考えられる。

「農村にも夏が来た」の見出しのもと、「若者達は南洋の土人の生活を思はせるヤグラを造り深更（しんこう）迄遊び疲れた軀を休める所はこれだ。ヤグラからヤグラに泊り歩くのが農村の習慣となつてゐる（北郡嘉瀬村毘沙門にて）」と記される。すなわちここでも、若者仲間の寝宿のような意味合いのある習俗であることが記されている81)。

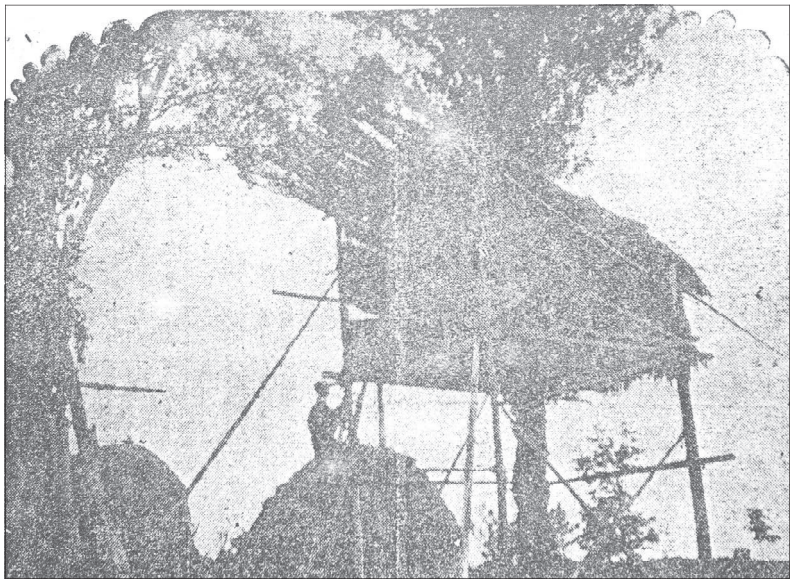

図3　『東奥日報』昭和6年7月11日付

⑦鰺ヶ沢町種里　（明治30～40年代）

津軽半島民俗総合調査団（1966）の報告によれば、「宿は部落内に一軒だけで気易い家であり、Kというチュウカの家でよく宿を提供した。宿のオヤジはワカイモノに悪いことをするな、などと注意を与える。夏はユカとかヤグラとか呼ぶ高い小屋を建てて寝泊りをしたというが、七二歳の伝承者は経験していない」と報告されている。72歳の伝承者が10代前半であった明治30年代の終わり頃には、この地域ではこの習俗が過去のものとなっていた82)。

⑧鰺ヶ沢町赤石　（年代不明）

青森県史編さんの調査によれば、若者より下の年齢集団だと思われるがが、「夏になると子供たちが木の上に小屋を作って、遊び場にしたり、川で水遊びをしたりした」という証言がある83)。

⑨平川市（旧平賀町）広船　（年代不明）

津軽地方民俗総合調査団による1967年の調査（内容は平山1978による）によると、尋常四年を終えた年齢で1～2歳違いの仲間で2～5人の「トモダチケヤク」を作り、マギなどで一緒に寝泊まりしたという。また、「二〇歳を過ぎると友達の家を泊り歩く。ワケエモノを呼んで泊らせる家もあり、そういう家では実子同様に躾をしたり嫁の世話をした。ワケエモノの方では宿の仕事を手伝うことはあっても、お礼の品を贈ることはない。夏は暑いのでヤグラを立てて寝た。馬屋の上のマギにはカリコが寝る」「五月の節供のホンド（山の芋）食べたら夜ヨバイに歩いてもいい」といった証言があったという84)。

⑩平川市（旧平賀町）小国　（参考事例は昭和20年代）

津軽地方民俗総合調査団（1967）（以下「調査団1967」）の報告よれば、「冬はエサ場、夏はマギ・ヤグラなどに寝て、部屋をかりることはないが、ワカイモノに入っている間は結婚までこういうところに寝泊まりした」という85)。

参考）平川市（旧平賀町）小国　筆者聞き取り（ヤグラではなくマギ（トマヤ）の事例）

「ワゲモノ仲間」が、「トマヤ」と称する馬屋の二階に床板を張り、ゴザを引いて寝泊まりした。タバコや酒を飲み、遊ぶ場所だった。そして「ヨベ」（よばい）の拠点であり、バゲ（晩方）になるとムラの若い女性の家に通った。ワゲモノ仲間は同級生などの1～2歳差程度の年齢集団で、リーダー格をオヤガダ（親方）と呼んだ。ヨベ（よばい）のときに、親方と弟分が鉢合わせしたこともあり、話を聞いて笑った。（昭和10年生男性、2023年筆者聞き取り）

⑪弘前市国吉　（年代不明）

「調査団」1967に「夏はヤグラをたててねた」が、その家にお礼はしない」と記されている。文中の「その家に」とはどのような意味か不明だが、屋敷の一室を宿として提供する家があり、その宿主が自宅の敷地などを提供して、夏場はヤグラを建てたという意味ではないかと推察される86)。

⑫弘前市鬼沢字山越　（昭和戦前期）

調査団1976に「昭和10年頃までマギに5～6人で寝たが、夏はヤグラをたててねることもあり、警察がとりしまったのでやらなくなった」と記される。平川市の事例で「トモダチケヤク」がマギに寝泊まりしていたことから、この事例もカレゴたちではなく若者仲間によるものであると思われる87)。基本的な拠点は「マギ」で、夏場は「ヤグラ」に寝泊まりしたことがわかる。

⑬五所川原市飯詰（いいづめ）　（戦前か）

『飯詰村史』(1951)によると、「植付後には青年共は三人乃至五人位組合つて五六間も高く矢倉を造り、此所に寝泊したもので、毎晩村の丁字街に集合して力試しをしたり、或は太鼓を叩くと温味が来るといつて大太鼓小太鼓が二十も三十も揃つてドンガンドンガンと叩付け、話音も聞えぬ程騒々しいものであつた」という88)。

⑭五所川原市金木町嘉瀬（かなぎ　か せ）（旧北津軽郡金木町嘉瀬）　（戦前か）

嘉瀬の地元の方々が主体となって作成した冊子『ふるさとのかたりべ』によると、「社交場」の小見出しで次のような回顧録がある。「夏休みに入ると上級生は『ヤグラ』を掛ける。七面様から少し北側に四本松があった。この四本松に掛ける「ヤグラ」は最大のもので、十人位いは常に寝泊りできるほどの大きさであった。／カヤを吊り、もよほしてくると小便はヤグラの上から放尿し、時には射程距離を競ったりの馬鹿騒ぎの社交場で、私達下級生は参加できない掟であった」89)。

⑮東津軽郡平内町茂浦（も うら）

調査団1967によると「宿は主に寄合に使うワケエモノ宿と寝泊りをする宿の二種類があったようで、後者はムラに七、八軒存在した。大きな家とか遠慮のいらぬ家に宿を頼むと断られることはめったになく、一〇年近く借りることもあり、薪を切ったり仕事が遅れていると手伝いに行ったり、盆正月には礼をする者もあった。宿のオヤジは結婚のハシカケになることはあったが、嫁をすることはなかった。夏はヤグラに寝泊りした」90)。

⑯東津軽郡蓬田村広瀬（よもぎ た）　（昭和50年代末か）

「三〇年くらい以前［筆者注　出典は2014年発行］には、夏の暑いときに、気の合うワゲモノ同士四、五人で、畑にヤグラを組んで、ノマ（わらで編んだ覆い、ネマとも）を重ねた屋根をかけ、広さ一坪ほどの小屋を作り、そこに寝泊まりしたことがあった。この小屋をユカといった。その後、教育上よくないということで無くなったというが、同村中沢でもワゲモノが船小屋の船に寝泊まり」した91)。

⑰青森市後潟（うしろがた）　（年代不明）

「夏、浜に櫓を作り、三、四人で寝泊まりしたという。浜に蚊がいなかったからだという。一～二歳の年齢幅で、気の合う者同士で集まった」92)。

⑱上北郡野辺地町馬門（の へ じ　ま かど）　（昭和20年代か）

瀬川清子による1949（昭和24）年の調査では、ともに74歳の夫婦からの聞き取りとして「ホーバイは、ミホーバイといって、気のあった人と集まってねる。七月から九月まで、五ヶ所七ヶ所十軒にも泊ったろう。おらえさねても隣さいったり、若者が泊りたいといえば、どこの家でもねせるが、大抵若者のある家に泊まる。集まってねるのが面白くて、ごろごろねて朝にはかえる。夏だからふとん等もなし、台所にねて起きたくなればいつでも起きてゆく。ヨガ（蚊）がいると沖に船を出してねたり、ぬくいからといってタナカイテ櫓をつくって泊まる。七、八人－五、六人－二、三人で。宿への礼もない。今の人は泊らない」93)とあり、ヤグラへの寝泊まりのほか、船での寝泊まりの習俗がみられた。話者の年齢から、1889（明治22）年頃の話であり、聞き取りの時点すなわち1949（昭和24）年ではこの習俗は廃れていた。

⑲下北郡風間浦村下風呂（しも ふ ろ）　（昭和20年代末ころ）

ゴガツヨウカ（旧4月8日の月遅れ）のハナミ（花見）の時に、神社の脇に「シロ」（城）と称して、カヤなどを使って屋根のない小屋を建てた。また、杉の木の皮を使って立ち木の上に小屋がけしたグループもいた。その日は行事日なので学校は午後から休みだった。4～5人ほどの隣近所の同齢集団がグループごとに「シロつぐさイグ」（城を作りに行く）といって小屋を建て、母親が作った餅などのオヤツを持参し、シロの中で食べて過ごした。それぞれの集団にはリーダー格の「おにいちゃん」がいた。別のグループのシロを襲撃しあい、防御しあって遊んだ。木の上の小屋は頑丈なので、何年も後まで残っていた記憶がある。昭和20年代末ころにこの習俗は途絶えた。

（昭和28年生男性、同30年生男性。2024年筆者聞き取り）

表1）「ヤグラ式寝宿」事例一覧（本県分）

	文献	年代	場所	時期	構造・数	高さ	用途	主体
	“Unbeaten Tracks in Japan”	1878年 （明治11年）	南津軽郡 黒石町	暑い夜	四角い屋根付きのヤグラ　幾つか/沢山の	20～25feet 約6～7.5m	蚊を避けるため 暑い夜、寝具を持ち込み寝泊まり	人びと
1	『外濱奇勝』	1796年 （寛政8年）	西津軽郡 館岡村	旧7月3日 （新8月5日）	高き木の枝に あなゝゐをゆひあげて 村々に点在	「高き木」	蚊を避けるため つづみ、笛にはやしける	わかき男ら
2	『昔の農村』	1877年以降（明治10年代）	南津軽郡 田舎館村	盆前	長い垂木を組んだ櫓 苫ぶき屋根 簀張り　蚊帳を吊る	床下13尺以上 約4.3m以上	「とても涼しい」 三味線や太鼓を鳴らして遊ぶ 寝泊まり	若者（友人） 同士が寝泊まり
3	『青森函館画談』	1891年頃 （明治24年頃）	青森町郊外		大木を支えにした ワラ屋根の櫓 蚊帳を吊る　「家毎に」	1丈2尺以上 約4m以上	住居が不潔でノミを避けて生活 寝泊まり	家族一同
4	『車力村誌』	1930年頃 （昭和5年）	北津軽郡 車力村	旧五月節供頃から旧盆過ぎ	四本柱のヤグラ 村内のあちこち	約4～5m 高いヤグラ	寝泊まり	若者たち 「組を作り」
5	『平内町史』	1907年以降 （明治40年代）	東津軽郡 平内町	蚊が出る季節	櫓 ワラ屋根		夜蚊が出るころに 寝泊まり　　たまり場	嫁をもらう前の若者たち
6	『東奥日報』	1931年 （昭和6年）	北津軽郡 嘉瀬村毘沙門	夏の風俗	四本柱の櫓 屋根		遊び疲れた体を休める 櫓を泊まり歩く	若者たち
7	『青年集団史研究序説』	明治時代	西津軽郡 鰺ヶ沢町種里	夏	ヤグラ ユカ	「高い小屋」	寝泊まり	ワカイモノ
8	『県史民俗編資料 津軽』	戦後	西津軽郡 鰺ヶ沢町赤石	夏	木の上に小屋		遊び場	子どもたち
9	『青年集団史研究序説』	戦後	南津軽郡 平賀町広船	夏	ヤグラ		「夏は暑いので」 寝泊まり	トモダチケヤク
10	『津軽地方の民俗』（二次）	戦前	南津軽郡 平賀町小国	夏	ヤグラ		寝泊まり 結婚まで	ワカイモノ
11	『津軽地方の民俗』（二次）		弘前市国吉	夏	ヤグラ		寝泊まり	
12	『青年集団史研究序説』	～1935年 （S10年頃迄）	弘前市鬼沢	夏	ヤグラ	「高い小屋」	寝泊まり 警察の取締りで途絶	
13	『飯詰村史』		北津軽郡 飯詰村	夏 田植え後	ヤグラ	5～6間	寝泊まり 近くで力試し、太鼓を叩いて騒ぐ	青年共3～5人
14	『ふるさとのかたりべ』		北津軽郡 金木町嘉瀬	夏	ヤグラ 蚊帳を吊る	四本松に掛ける	寝泊まり　「馬鹿騒ぎの社交場」 ヤグラの上から放尿して遊ぶ	上級生10人位
15	『青年集団史研究序説』		東津軽郡 平内町茂浦	夏	ヤグラ ユカ		寝泊まり 別に、寄合する「ワケエモノ宿」	ワケーモノ
16	『県史民俗編資料 津軽』	1984年頃 （S50年代末）	東津軽郡 蓬田村広瀬	夏	ユカ ノマを重ねた屋根 広さ1坪ほど		畑に建てる 教育上よくないとして廃れた	ワゲモノ4～5人
17	『県史民俗編資料津軽』		青森市後潟	夏	ヤグラ		浜に建てる 「浜に蚊がいなかったから」	1～2歳の年齢幅で3～4人
18	『若者と娘をめぐる民俗』	1889年頃 明治22年頃	上北郡 野辺地町馬門	夏 7～9月	ヤグラ		寝泊まり　「蚊がいると」「暑いので」　別に、「ワケエモノ宿」あり	ホーバイ ミホーバイ
19	筆者聞き取り	1954年頃 S20年代末	下北郡風間浦村下風呂	初夏	木の上に小屋がけ			4～5人の子どもたち

2.3.「ヤグラ式寝宿」の特徴

2.3.1 習俗の内容

2.2.に挙げた事例は、**2.1**の定義に照らして、①主体が未婚の若者集団であること、②集団は、ムラにおいて組織的位置づけられたものではなく、親近感で繋がり、仲間同士の交流を楽しむものであること、③独立した専用の臨時的仮設的な建物を、遊びや寝泊まりの拠点としていることから、これらの条件に合わない一部を除き、多くは若者仲間による寝宿の慣行であると考えられる94)。

2.3.2. 習俗の分布

2.2.の事例は、九州地方では鹿児島県をはじめ、長崎県、熊本県などの九州地方南西部、四国では幡多地方、東北地方では特に青森県津軽地方・秋田県にみられる。

2.3.3. 青森県における習俗の特徴

事例**2.2.4.**のデータおよび前ページ**表1**から得られる特徴は次のとおり。

(1)季節　夏季(①～⑲)
(2)地域　津軽地方(①～⑰)、上北郡(⑱)、下北郡(⑲)。すなわち津軽地方(農村部)に偏在。
(3)呼称　「ヤグラ」(②④⑦⑭⑮)、「ユカ」(⑦⑯⑱)
(4)高さ　床下4～5㍍程度(②③④)が多く、高いもので10㍍程度(⑬、および①の挿絵)
(5)構造　**a,** 立木のみを利用するもの(①⑧⑲)
b, 4本の垂木を利用して組むもの(①②③⑥)
c, 立木とヤグラを組み合わせるもの(①③)
屋根は藁葺き(③⑤⑯)、苫葺き(②)、周囲にムシロや簀を垂らして遮蔽(②⑥)、内部に蚊帳を吊す(②③⑭)
(6)様態　独立・仮設の構築物(①～⑲)　※**2.1.3.**参照
(7)数　村々に点在(または村内に点在)＝同様の建築物が複数みられる(①③④)
(8)目的　寝泊まり(①～⑦、⑨～⑱)
「蚊から逃れるため」(①③⑤⑰⑱)「暑さを避けるため」(②⑨⑱)[という理由付け]
あそびや交流(①②⑧⑬⑭)　「ヤグラからヤグラへと泊まり歩く」
(9)主体　未婚の男性集団(ワカイモノ、ワゲモノ、ワケーモノ、トモダチケヤグ、ホーバイ)2～3名から10名(①②④～⑲)
(10)時代　江戸時代後期(①)、戦前(②③④⑤⑥⑦⑫⑱)、戦後～昭和中期(⑧⑨⑩⑳)、昭和後期(⑯)
(11)その他　・子どもたちのヤグラ遊びとして、戦後も受け継がれていた可能性がある(⑨⑳)。参考までに、子供組の行事には仮設の小屋を拠点とするものも多く見られるが、若者組の世界から脱落して子供の手に移ったという歴史的過程が想定される95)。
・地上という日常世界から離れた独立空間で仲間との共同生活を楽しむ心意は、納屋の二階(マギ)での寝泊まりと共通すると考えられる。津軽ではヤグラが夏季の拠点である一方、マギは秋～春の拠点だった(④⑨⑫)。
・記録という観点から、江戸時代後期の挿絵付きの記録(①)は、全国的にみても非常に稀である。昭和戦前期の写真(⑥)も同様に非常に貴重である。

以上を全国的な傾向**2.3.1.**と比較したときの本県の特色としては、(3)呼称:「ヤグラ」の他に「ユカ」という呼称があること、(5)構造:立木を利用する構造も見られること、ゆえに10㍍近くの高さに至る可能性があること、(8)目的:「蚊から逃れるため」「蚊帳を吊す」など、「蚊除け」という理由付けが表明されること、が挙げられる。

3.バードが見た「構造物」の正体

本稿**1.**で、「構造物」の描写について確認し、**2.**で、「ヤグラ式寝宿」の特徴を明らかにした。これらに基づき、バードが目撃した「構造物」の記述と「ヤグラ式寝宿」の特徴を対比したのが**表2**である。両者を比較すると、“a number of square covered platforms on scaffold poles twenty and twenty five feet high”という構造物の特徴が「ヤグラ式寝宿」の構造と完全に一致するうえ、“people carry their bedding on very hot nights, to be out of the way of mosquitoes”という目的・理由付けとも合致し、時代的にも地理的にも季節的にも、バードの記述との整合性がある。

以上から、バードが黒石で見た「ヤグラ」は、若者仲間の寝宿慣行に基づくもの(「ヤグラ式寝宿」)であると筆者は考える。

表2 「構造物」の比較

	バードが黒石で見た構造物	津軽地方の「ヤグラ式寝宿」
年代	1878	江戸時代後期～昭和戦前期頃まで盛ん
場所	Kuroishi	津軽地方で盛ん
季節	summer	夏
構造	square covered platforms on scaffold poles	４本の垂木（柱）を組んだ四角いヤグラ
屋根	covered platforms	ワラ葺き/苫葺きの屋根
数	a number of	点在する
高さ	20～25ft (6～7.5m)	4.5～10m
目的	people carry their bedding on very hot nights	寝泊まりするため
		暑さを避けるため
	to be out of the way of mosquitoes	蚊を避けるため

おわりに

イザベラ・バードが黒石で遭遇した「構造物」については、複数の研究者により、「こみせ」説、「火の見櫓」説などが示されている。それらは著名な研究者によって提唱された説であり、単行本として流布してもいることから、社会的な影響は大きい。だからこそ、さまざまな解釈の可能性を示し検討する必要と価値がある。本稿ではバードが目撃した「構造物」についての従来の説を確認し(**1.**)、次に津軽地方においては若者集団の寝宿に高床建物(ヤグラ)が用いられたことを明らかにしたうえで(**2.**)、バードが見た「構造物」が若者仲間による寝宿としてのヤグラ(「ヤグラ式寝宿」)である可能性を結論として示した(**3.**)。

検証の過程で、「ヤグラ式寝宿」の習俗も明らかにした(**2.**)。これは、夏に垂木や樹木を利用してヤグラを組み、しばしば「蚊から逃れるため」という理由づけのもと、若者仲間が集団で宿泊する習俗であり、本県では主に津軽地方において昭和初期頃まで盛んにおこなわれていたことが明らかになった。その実像を知る上で、江戸時代後期の挿絵や昭和戦前期の写真の存在は意義が大きく、特に後者はこれまで全く知られていなかった画期的な発見であった(**2.2.4.⑥**)。

昭和後期まで、子どもたちによるヤグラでの遊びが継承されていたことも注目される。寝宿慣行との連続性を安易に語ることはできないが、関連性(変容・変質)が想定される(**2.3.3.**)。

また、「ヤグラ」とは異なるが、しばしば若者集団の拠点として「マギ」(厩や納屋の屋根裏部屋)が選ばれる背景には、地上という日常世界から離れた空間で仲間だけの共同生活を楽しむ、という点で「ヤグラ式寝宿」と共通の心意があると考える。本稿では様式に焦点を合わせて検討したが、心的な側面に注目するなら、この習俗はスタイルを変えつつも、その本質は近年まで青少年集団に受け継がれてきた可能性がある(**2.3.3.**)。

広域的な視点では、ヤグラ形式の寝宿(類似の様式)が列島(ヤマト文化圏)の周縁部に偏在することも明らかになった(**2.3.2.**)。この事実から何らかの意味を読み取るためには、更なるデータの収集と蓄積が必要である。

謝辞

榎本 直樹氏、小池 淳一氏、林 京子氏、久野 俊彦氏に御礼を申し上げます。

後注）

2)高畑美代子「イザベラ・バードの生前に出版されたUnbeaten Tracks in Japanの4種の版における違い－思考・行動の変化を反映した改訂－」p.141

3)金坂清則2014『イザベラ・バードと日本の旅』平凡社新書754p.17

4)同上754pp.154－155

5)高畑美代子「イザベラ・バードの生前に出版されたUnbeaten Tracks in Japanの4種の版における違い－思考・行動の変化を反映した改訂－」pp.126,134-136

6)金坂清則2012『完訳 日本奥地紀行2』(東洋文庫823)p.418　7)同上p.418-419

8)高畑美代子2009『イザベラ・バードの北東北』pp.79-80。同書のもとになった『陸奥新報』連載「イザベラ・バードの北東北」№29「人力車で黒石を散策　こみせ通りの特徴紹介」の記事でも、ほぼ同様の断定的な主張がおこなわれている(『陸奥新報』2008年4月2日付)

9)伊藤孝博2010『イザベラ・バード紀行「日本奥地紀行」の謎を読む』(無明舎出版)pp.259-262　10)同上pp.259-262

11)金坂清則2012『完訳 日本奥地紀行 2 －新潟－山形－秋田－青森』(東洋文庫823)pp.418－419(「第三十五報」の訳注)

12)牧田茂1958「年齢集団」,西岡虎ノ助ほか編1958『郷土研究講座』第五巻 社会生活pp.64-65　13)同上p.68　14)同上p.68

15)平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)2、牧田茂1958「年齢集団」西岡虎ノ助ほか編『郷土研究講座』第五巻 社会生活,p.70

16)関敬吾1958「年齢集団」(『日本民俗学大系』第三巻所収p.143)

17)牧田茂1958「年齢集団」西岡虎ノ助ほか編『郷土研究講座』第五巻 社会生活p.82

18)平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)p.121

19)竹内利美1991『ムラと年齢集団』pp.10-11

20)前田安紀子1973「配偶者の選択」青山道夫・竹田旦ほか編1973『講座 家族』3婚姻の成立 p.219、八木透編2001『日本の通過儀礼』p.81

21)平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)P.11注(1)

22)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』p.140　23)同上pp.136-137

24)平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)pp.2-3,155　25)同上pp.120-121

26)柳田國男・大間知篤三著1937『婚姻習俗語彙』pp.260-262

27)柳田國男・大間知篤三著1937『婚姻習俗語彙』pp.257-258、有賀喜左衛門1948『日本婚姻史論』p.76、竹内利美1991『ムラと年齢集団』pp.8-11、牧田茂1958「年齢集団」、西岡虎ノ助ほか編1958『郷土研究講座』第五巻 社会生活,p77

28)柳田國男・大間知篤三著1937『婚姻習俗語彙』p.264　29)同上p.265

30)八木透2000「寝宿」,福田アジオ・新谷尚紀ほか編『日本民俗大辞典』(下)p.306

31)牧田茂1958「年齢集団」,西岡虎ノ助ほか編『郷土研究講座』第五巻 社会生活,p76

32)竹内利美1991『ムラと年齢集団』270、八木透編2001『日本の通過儀礼』p.81

33)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』p.95　34)同上p.90

35)竹内利美1991『ムラと年齢集団』pp.8-11

36)八木透編2001『日本の通過儀礼』p.81

37)柳田國男・大間知篤三著1937『婚姻習俗語彙』pp.257-258、中山太郎1930『日本若者史』p.83

38)竹内利美1991『ムラと年齢集団』pp.8-11　39)同上p.270　40)同上p.9　41)同上pp.8-11

42)竹内利美1991『ムラと年齢集団』p.6「これまでは若者組の合宿所・寄合所を、常設・臨時の別なく寝宿として一括してきたきらいがあり、(中略)寝宿は常設的なものに限定するほうがまぎれがない」

43)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』p.526　44)同上p.206

45)弘文堂1989『写真で見る日本生活図引』第5巻「つどう」p.135

46)桜井徳太郎1968『日本人の生と死』民俗民芸叢書p.30 口絵

47)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』p.95　48)同上p.518

49)宿毛市、土佐清水市、四万十市、黒潮町、大月町、三原村の3市2町1村で構成される、四国の西南端にある地域。

50)高知市役所・高知市観光協会編1955『新土佐物語』pp.22-23

51)大方町史編修委員会編1963『大方町史』pp.488-489

52)中山太郎1930『日本若者史』p.83

53)有賀喜左衛門1948『日本婚姻史論』p.87

54)大間知篤三1958「婚姻」『日本民俗学大系』第3巻 社会と民俗(1)p.197

55)牧田茂1965『人生の歴史』,日本の民俗第5巻(ページ番号なし)

56)牧田茂1958「年齢集団」,西岡虎ノ助ほか編『郷土研究講座』第五巻「社会生活」,pp.54-92

57)竹内芳太郎1986『野のすまい』p.201

58)高知市役所・高知市観光協会編1955『新土佐物語』pp.22-23

59)広田孝一遺稿集編修委員会編1968『広田孝一遺稿集』pp.349-350,(初出:NHK高知放送局編1965『土佐路のはなし』pp.225-226)

60)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』p.90

61)竹内芳太郎1986『野のすまい』p.201　62)同上pp.201-202

63)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』口絵　64)同上p.95　65)同上p.385

66)牧田茂1952『生活の古典－民俗学入門－』(角川新書20)p.182

67)牧田茂1958「年齢集団」,西岡虎ノ助ほか編『郷土研究講座』第五巻 社会生活,pp.54-92所収　68)同上pp.76-77

69)牧田茂1965『人生の歴史』,日本の民俗第5巻 ページなし(書物全体を通してページ番号が付与されていない)。

70)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』p.372　71)同上p.374　72)同上p.95

73)仙台市史編さん委員会編1998『仙台市史』特別編6 民俗p.387　74)同上p.387頭注　75)同上p.388

76)内田武志・宮本常一編訳2000『菅江真澄遊覧記 3』(平凡社ライブラリー345)p.270

77)佐藤末吉「昔の農村」(明治10年、田舎館村生)著作年不明『昔の農村』(葛西善一ほか編1993『津軽の農書』,みちのく双書第36集所収)

78)六門屋主人・石井研堂1891『青森函館画談』(函館市中央図書館蔵)。東京日本橋区堺町五番地の「六門屋主人」が1879(明治12)年に描いた青森・弘前・黒石と函館のスケッチを石井研堂が1891(明治24)年に転写加筆した資料(青森県2002『青森県史資料編 近現代1』pp.661-662川西英通による資料解説より)。図は青森県2002『青森県史資料編 近現代1』p.726より転載

79)平内町史編さん委員会編1977『平内町史』(上巻)p.474

80)車力村役場1973『車力村誌』p.157

81)東奥日報社1931『東奥日報』昭和6年7月11日付

82)平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)147-148で紹介されている「津軽半島民俗総合調査団」(1966)による調査時の事例。

83)古川実2014「ムラにおける年齢集団」青森県史編さん民俗部会編『青森県史民俗編 資料 津軽』p.17

84)平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)pp.151-152

85)青森県津軽地方民俗総合調査団編1967『津軽半島の民俗』(第二次報告)p.31　86)同上p.31　87)同上p.31

88)福士貞蔵編1951『飯詰村史』pp.246-247

89)嘉瀬ふるさとを探る会編1983『ふるさとのかたりべ』第三集pp.53-54

90)平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)pp.149-150で紹介されている「津軽半島民俗総合調査団」(1966)による調査時の事例。

91)古川実2014「ムラにおける年齢集団」青森県史編さん民俗部会編『青森県史民俗編 資料 津軽』p.17　92)同上p.17

93)瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』p.367、昭和24年3月28日調査

94)ただし、常設の宿のみを「寝宿」とし、臨時的な宿は「寝宿」に含めないことを提案する考え方もある(竹内利美1991『ムラと年齢集団』p.9)。また、青森県津軽地方を対象とした調査報告書の中には、若者仲間によるヤグラでの寝泊まりについて、若者宿(寝宿)と呼べるか疑問であるといった意見もある。青森県津軽半島民俗総合調査団による『津軽半島の民俗』(1966)の平山和彦と宮原兎一の報告によれば、津軽地方では「若者宿の伝承はきわめて稀薄」(調査した33集落中、「はっきりしないもの」を含め12集落のみ)であるとし、カレゴ(借子)がマギ(マゲ・マニ:納屋や作業場の二階)で寝起きする事例や、「夏の間、蚊を防ぐためが主目的で、ヤグラ(サジキともいう)をつくり、そこで若いものが共同して寝起きする」事例を挙げて、「これらは若者宿とちがう」が、混乱して考えられていた」と述べている(平山和彦・宮原兎一1966「若者組と青年団」,青森県津軽半島民俗総合調査団編1966『津軽半島の民俗』(第一次報告)p.25)。同調査団の第二次報告である『津軽地方の民俗』(1967)では、夏場のヤグラやマギへの寝泊まりが「若者宿とよばれるべきか疑問である」(平山和彦・宮原兎一1967,「青森県津軽半島民俗総合調査団編1967『津軽地方の民俗』(第二次報告)p.31)、としながら「若者宿とも見られ、その間の区別や意味がはっきりしなかったとも思われる」(同書p.25)と述べる。『青森県教育史』(1972)では、「夏の間、蚊を防ぐのを主目的としてヤグラ(サジキともいう)をつくり、そこで若者が共同で寝起きしたところもあった。このような形態は戦前まで各地にみられたが、年季奉公の作男であったカリコが青年たちの寝間であるマギに寝泊りしたことから、これが若者組と混同してみられている」青森県教育史編集委員会編1972『青森県教育史』p.402)と記され、カレゴはあくまで労働力の賃貸し制度であって、マギの慣習には若者宿のような教育的要素がなく、若者宿とは異質のものであるとして、マギでの寝泊まりは若者宿とはいえないという考えが表明されている。そして「津軽地区における寝泊まりその他寄合の性格は、南部地区の場合と比べると不明な部面が多く、かつまた、青年の共同生活の意義も薄かったように思われる」(同書p.402)としている。以上のように、マギでのカレゴたちの寝泊まりだけではなく、ヤグラでの若者集団による寝泊まりをも含めて「若者宿ではない」という見方がある。

しかし上述の調査に関わった平山和彦による『青年集団史研究序説』(1978)では、「寝宿に相当するものとしてマギ(納屋)やヤグラがどこでも使用されていた」とし、マギやヤグラも寝宿にあたるとしている(平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)pp.155-158)。近年の自治体誌編纂に係る調査報告でも、「若者組には若者宿(マゲとかマギといい、物置の二階のこと)があって、夜になるとそこに集まって寝泊まりをし、仲間だけの生活をすることもあった」鈴木政四郎1999「社会生活」青森市史編集委員会編2001『青森市史叢書1 民俗調査報告書第一集 矢田・宮田・滝沢の民俗』)、「マヤ(馬屋)とか作業小屋の屋根裏に部屋が作ってあって、そこをマゲといった。ワゲモノは何人か集まって、マゲで寝泊まりした。カログ[筆者注:カレゴ(借子)と同じ]がいなくなって空いたところとか、寝る場所があればそこに入った」「合子沢では(中略)結婚すればマゲには行かなかった。長男、次男、カログにかかわらず皆そうだった。集まりの年齢幅があり、一番若いのは使い走りをさせられた」「上野[筆者注:青森市上野]でも青年団の中でも親しい者同士が集まって、マゲに寝泊まりした。これにはカログも入った」(古川実2001「社会生活」青森市史編集委員会編2001『青森市史叢書3 民俗調査報告書第三集 横内・荒川の民俗』)と記されており、カレゴ(借子)を含めた若者集団によるマギ(またはヤグラ)での寝泊まりが、結婚を機に脱退する「寝宿」の習俗として認識されている。宮本常一も「津軽から秋田にかけて、若者たちが夏になると高い大木の枝に板をならべて棚をつくり、その上に筵をしいて夕涼みをしたり、夜分そこで寝たりしている。蚊もあまりこず、涼しいからというが、これも若者宿の一形式であった」と述べている(内田武志・宮本常一編訳2000『菅江真澄遊覧記 3』(平凡社ライブラリー345)p.287,宮本常一解説)。

以上のような見解の違いは、集会所としての機能を持ち、ムラの組織に位置づけられている公的な性格の強い宿のみを「若者宿」とみとめるか、仕事宿や遊び宿、寝宿を含めて「若者宿」と呼ぶかという、若者宿の定義の相違、ひいては**2.1.2.**で確認した若者集団の定義にもとづく相違である。本稿で扱っているヤグラ式寝宿は**2.3.1.**で述べたとおり、若者仲間による寝宿の一形式であると捉えることが妥当であると考える。

95)竹内利美1991『ムラと年齢集団』p.5

文献

(民俗学関連)

青森県教育史編集委員会編1972『青森県教育史』

青森県津軽地方民俗総合調査団編1967『津軽地方の民俗』(第二次報告)

青森県津軽半島民俗総合調査団編1966『津軽半島の民俗』(第一次報告)

有賀喜左衛門1948『日本婚姻史論』

内田武志・宮本常一編訳2000『菅江真澄遊覧記 3』(平凡社ライブラリー345)

NHK高知放送局編1965『土佐路のはなし』

大方町史編修委員会編1963『大方町史』

大間知篤三1958「婚姻」『日本民俗学大系』第3巻 社会と民俗(1)

弘文堂1989『写真で見る日本生活図引』第5巻「つどう」

高知市役所・高知市観光協会編1955『新土佐物語』
古川実2014「ムラにおける年齢集団」青森県史編さん民俗部会編『青森県史民俗編 資料 津軽』
古川実2001「社会生活」青森市史編集委員会編『青森市史叢書3 民俗調査報告書第三集 横内・荒川の民俗』
嘉瀬ふるさとを探る会編1983『ふるさとのかたりべ』第三集
桜井徳太郎1968『日本人の生と死』 民俗民芸叢書30 口絵
佐藤末吉『昔の農村』(葛西善一ほか編1993『津軽の農書』,みちのく双書第36集所収)
車力村役場1973『車力村誌』
菅江真澄1796『外濱奇勝』(重要文化財・青森県立郷土館蔵)
鈴木政四郎1999「社会生活」青森市史編集委員会編『青森市史叢書1民俗調査報告書第一集 矢田・宮田・滝沢の民俗』
関敬吾1958「年齢集団」,『日本民俗学大系』第三巻所収
瀬川清子1972『若者と娘をめぐる民俗』
仙台市史編さん委員会編1998『仙台市史』特別編6 民俗
竹内利美1991『ムラと年齢集団』
竹内芳太郎1986『野のすまい』
東奥日報社1931『東奥日報』昭和6年7月11日付
中山太郎1930『日本若者史』
平内町史編さん委員会編1977『平内町史』(上巻)
平山和彦1978『青年集団史研究序説』(上)(下)
広田孝一遺稿集編修委員会編1968『広田孝一遺稿集』
福士貞蔵編1951『飯詰村史』
前田安紀子1973「配偶者の選択」,青山道夫・竹田旦ほか編『講座 家族』3婚姻の成立
牧田茂1958「年齢集団」,西岡虎ノ助ほか編『郷土研究講座』第五巻 社会生活
牧田茂1965『人生の歴史』,日本の民俗第5巻
八木透編2001『日本の通過儀礼』
柳田國男・大間知篤三著1937『婚姻習俗語彙』
六門屋主人・石井研堂1891『青森函館画談』(函館市中央図書館蔵)
(イザベラ・バード関連)
高梨健吉訳1973『日本奥地紀行』平凡社
楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳2002『バード日本紀行』雄松堂出版
高畑美代子訳2008『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』
高畑美代子2010「イザベラ・バードの生前に出版されたUnbeaten Tracks in Japanの4種の版における違い－思考・行動の変化を反映した改訂－」弘前大学大学院地域社会研究科「弘前大学大学院地域社会研究科年報」7 pp.115-145
時岡敬子訳2008『イザベラ・バードの日本紀行』(上)(下)講談社学術文庫
金坂清則訳2012-2013『完訳日本奥地紀行』1-4 東洋文庫819・823・828・833
金坂清則訳2013『新訳日本奥地紀行』東洋文庫840
高畑美代子2007-2008「イザベラ・バードの北東北」(陸奥新報2007年9月12日～2008年11月19日連載(全62回)
高畑美代子2009『イザベラ・バードの北東北』
金坂清則2014『イザベラ・バードと日本の旅』平凡社新書754
伊藤孝博2010『イザベラ・バード紀行「日本奥地紀行」の謎を読む』無明舎出版
金沢正脩2010『イザベラバード「日本奥地紀行」を歩く』JTBパブリッシング
釜澤克彦2009『イザベラ・バードを歩く』彩流社
Bird, Isabella L. *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé.* 2vols. London: John Murray, 1880.
- - -. *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels on Horseback in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé.* New York: G.P. Putnam's Sons, 1880.
- - -. *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrine of Nikkô.* Abridged ed. New York: G.P. Putnam's Sons, 1885.
Mrs. J. F. Bishop [Isabella L. Brid], *Unbeaten Tracks in Japan: A Record of Travels in the Interior, Including Visits to the Aboriginies of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé.* London: George Newnes Limited, 1900.

青森県立郷土館研究紀要 第49号（令和７年３月） 正誤表

頁	行・図番号	誤	正
161	図1　キャプション	『外濱奇勝』（重文・青森県立郷土館蔵）	『外濱奇勝』（**県重宝**・青森県立郷土館蔵）